五〇ドル原油

例年、七月に入ると夏休みを取る欧米人がちらほらと出て来てリヤドの街からはその姿が徐々に少なくなって行く。特に、テロが激しくなった二〇〇四年は夏休みを早めに取るものが多く急速にその姿が少なくなって行った。三友商事リヤド支店の従業員も順番に夏休みに入っていたが、慎太郎は特命もありサウジに残っていた。一〇月初旬のラマダンまでは長期休暇をとらないと心に決めていた。

サウジ治安部隊には夏休みなど無かった。

テロ掃討作戦は着実に進められていた。

八月五日には、イエメン国境に近い地方都市で、最重要指名手配者リスト中のテロリスト一人が追跡された末に無抵抗で逮捕された。

これで、二〇〇三年末に公表された最重要指名手配者二六人の半数を上回る一五人が殺害もしくは逮捕されたことになる。

そのような中、八月七日には、リヤドで事務所内にいたアイルランド人がテロリストに頭と胸を撃たれて殺害されてしまった。

八月中旬にはメディナ、ブライダといった地方都市及びリヤドで一斉捜査が実施されテロリストが相次いで逮捕されたが、この時には最重要指名手配者の逮捕は無かった。

原油価格は、アリ石油相の発言が尾を引いて七月初めも上昇基調が続いた。

さらに、イラクのバスラ石油出荷基地に対するテロ懸念が生じると、米国における石油在庫の減少も重なって、原油価格は七月一四日に四〇ドル、一六日には四一ドルを超えた。

その後、ロシアの大石油企業ユコスの脱税問題に伴う減産懸念も加わって二八日には四二ドル、三〇日には四三ドルと次々と史上最高値を更新して行った。八月三日には四四・一五ドルに達した。

そして、イラクで一度収拾したかに見えたシーア強硬派の

サドル師の民兵が再び攻勢をかけると、石油供給懸念が高まり、これが一層の高値を招いた。

八月一二日には四五ドル、翌一三日には四六ドル、更に八月一八日には四七ドルを超え、そして八月一九日には、四八・七〇ドルへと上昇した。

こうしてイブラヒムの信奉する投機家ピキンズの予言していた五〇ドルが目前に迫った。

高価格に落胆している植木と喜んでいるイブラヒムの二人とも、夏休み休暇を取って、それぞれ、インド、日本へと帰って行った。

植木は、単身赴任だったから久しぶりに家族と会えるのを楽しみにしていた。

また、留守宅では七匹の猫が植木の帰りを待ち焦がれていた。留守中は君子がその面倒を見ていたが、これが単身赴任の最大の理由でもあった。その理由をサウジ人や事務所の同僚に言うと皆笑った。中には、そう言うとペットを連れて来たらと言うものもいたが、そんな時、植木はペットはサウジ

に馴染まないし、そもそもペットを海外に連れて行くほど可哀想なことはないと説明していた。また、ペットを海外に連れて行くための手続きなどの煩雑さ困難さも充分な説得材料だった。

慎太郎は、ポールの死で落胆していたスルタンを慰めることにした。

スルタンは大分立ち直っていた。

慎太郎は、リヤドのサウド大学でバイオ関係の教科を教えているスルタンが普通の教育関係者のように夏休みにも結構多忙なのではないかと思っていたが、彼は暇になったと言っていた。

スルタンは、将来、教授、助教授を目指すわけではなく、暇な時に講師として教えているだけなので、学校の持つ様々な運営関係の委員会の委員など雑事をする必要が全くなく夏休みは本当に夏休みになると言っていた。

慎太郎は、宗教関係に強力なネットワークを持つ彼が、バイオを教えていると聞いた時には最初驚いた。最先端の科学

を教えるものが宗教を心から信じている・・・そのアンバランスが、現代人である慎太郎には不思議に思えたのだ。

慎太郎が電話をすると、スルタンは、いつもの通り急にこの日マグレブのお祈りの後に、慎太郎のレジデンスを訪れたいと言いだした。たまたまスケジュールが空いていたので慎太郎はそれを快く受け入れることにした。

慎太郎は、レジデンスの窓からいつものように、遠くの夕陽を眺めていた。

窓からは、向かい側のホテルとの間に広大な緑の芝生、そしてファハド大通りの向かい側には、タミミ・スーパーが見え、その後ろには白壁の大きな住宅が幾つも続いていた。その遠くには、美しい白いモスクがかすかに見えた。慎太郎は、このモスクの遠景がたいそう気にいっていた。

水平線の彼方には、アリ石油相のディナーパーティーの会場となった沙漠の断崖が連なっているのが見えた。今はその方向に大きな夕陽が沈もうとしていた。やがて、アザーンの声が遠くかすかに聞こえてきて、辺りは静かにたそがれてい

った。

・・・・・

「アシュハド・アンナ・ムハンマド・ラスルウウーラアアアー(マホメットは神の使徒なり)」

・・・・・

暫らくして、受付から、スルタンが来たと連絡があった。慎太郎が下まで言って出迎えると、彼はトーブを来た東洋人らしい仲間を一人連れてきていた。

こんな調子で、いつも知らない人間を断りも無く連れてくるスルタンには呆(あき)れ返っていたが、もう大分慣れてきた。

「シンタロウ、こちらはイスマイルだ。宜しく。彼は、ウラマー(法学者)で、インドネシアからリヤドに来ている」

とスルタンは、そのインドネシア人を紹介した。慎太郎は自己紹介をして握手をした。

彼は、リヤドのモスクでコーランを教えているとのことだった。イスラム圏の広がりは大きいので、それは当然のことかもしれないが、慎太郎には意外だった。インドネシアでは、二億一〇〇〇万人の人口の八七％がムスリムだから、そのような人物が居てもおかしくはないのだろう。しかし、本場サウジで宗教エリートとして勤めているなどとは夢にも思わなかった。

また、インドネシアでは、イスラム過激派のテロも多数起こっている。バリ島のディスコ爆破事件も記憶に新しい。

インドネシアの過激派組織ジャマヒリーアは、沙漠のサソリとの関連性を追及されたこともあった。まさか、このイスマイルが過激派ということは無いだろうとは思いながら、慎太郎にしてみればあまり気持ちの良いものではなかった。妙に愛想の良いところもあまり感心しなかった。彼は一般のサウジ人よりもずっと英語が達者だった。

イスマイルは、イスラムの素晴らしさをとうとうとまくしたてた。聞いている慎太郎は疲れてきた。スルタンは、にこ

にこしてイスマイルの説明を聞いていて、彼の説明を止めようとする素振りは一向に見られなかった。

慎太郎が、我慢の限界に近づいた頃、ちょうど、イッシャーのお祈りの時間が近づいてきた。

これで、この敬虔(けいけん)なムスリム達は、お祈りに行ってくれるだろうと、慎太郎は内心ほくそ笑んだ。残念そうに別れを言えるものとホッとしていた。

ところが、スルタンは、慎太郎にとんでもない提案をした。

「シンタロウ、良ければ、ここでイッシャーのお祈りをさせてくれないか」

レジデンスの部屋は広く、リビングルーム兼客間は二〇畳ほどはあり、ダイニングテーブルと応接セットが置いてあったものの、二人がお祈りをするくらいのスペースは十分にあった。むしろ、床には高級な絨毯が敷き詰められていて、お祈りにはお誂(あつら)え向きだった。慎太郎が嫌と言える筈はなかった。やれやれと気が重かった。

スルタンは、慎太郎にメッカの方角を聞いたが、慎太郎は知る筈もないので知らないと答えた。するとスルタンはそれでは西はどちらだと聞いてきた。西は太陽が沈む方向だから良くわかっていたので、慎太郎がその方角を教えると、そちらに向かって二人はお祈りを始めた。

スルタンがリードして、イスマイルが従っていたが、二人のお祈りの姿は様になっていた。慎太郎は見ている内に何故か敬虔な気持ちになってきた。その姿は、先ほどの説教に比べれば、ずっと慎太郎の心を打った。

お祈りは、アラーの唯一性、主性を言葉と体で表す行為であり、ここでムスリムは、アラーと向き合い、アラーが主であることを讃美し、自己がその僕(しもべ)であることを表明する。

二人は、姿勢を正し直立すると、両手を開いて耳の脇にかざし、

「アッラアーア、フ・アフバル(アラーは偉大なり)」

と唱えた。それが終わると、静かに両手を下げ、今度はそ

の両手を体の前で組み何やらぶつぶつと唱えた。次に、腰を曲げ、頭を垂れると、両手を膝に付け、

「アッラアーア、フ・アフバル」

と、また唱えた。そして、体を元に戻した。

次に絨毯の上に正座すると、

「アッラアーア、フ・アフバル」

とさらに唱え、額を絨毯につけて祈った。これを二回繰り返した。

これが一単位のようで、二人は二単位行った。

そして、この正座をした状態で、うつむき、神を称え、預言者とムスリムへの神の祝福を祈る。

二人は、その後、座ったまま、顔を正面に向け、

「アシュハド・アン・ラ・イラハ・イラッラアーアアアアアアアアー(アラーの他に神は無し)、アシュハド・アンナ・ムハンマド・ラスルウウーラアアアアー」

と唱え、最後に、

「アッサラーム・アレイコム」

と言いながら、首を右と左に振った。

最後に首を左右に振るのは、右の肩の善行を記録している天使と左肩の悪行を記録している天使に挨拶をするためのようだ。

ムスリムではない慎太郎だったが、敬虔な祈りの雰囲気に浸っていた。

祈りは神聖な気持ちを醸し出す。

ひたすら祈る姿は全てを超越して人の心を惹き付ける。

彼等はこうして一日の最後の礼拝を終えると、清々しい表情で慎太郎に話しかけてきた。

「我々は、これから、夕食を食べに行くが、慎太郎も一緒に来ないか。この近くにサウジ料理もあるし、レバノン料理もある」

ファイサリア・レジデンスのあるオレイヤ地区は高級住宅街で安全な場所だった。慎太郎は純粋なサウジ料理店には行ったことがなかったので行ってみることにした。

三人は、スルタンの車で出かけた。そのレストランは本当

に近かった。

中に入ると、サウジ人しか居なかった。個室ではないが、胸の高さくらいの仕切りでいくつものスペースが区分けされていた。

その一つに通されると中には絨毯が敷かれていて床の中央には大きな丸いテーブルが置かれていた。三人はその回りに座った。この店の店員は、他のほとんどのレストランが出稼ぎの外国人従業員で占められているのとは異なり全員サウジ人だった。彼等は皆愛想が良く気さくだった。待合に居た茶坊主も慎太郎がカメラを持っているのを見かけると自分の写真を撮るようにねだった。

スルタンは、慎太郎に何が良いかと聞いたが、慎太郎は、サウジ料理をあまり知らなかったのでサウジらしい料理であれば何でも良いと言ってスルタンに任せた。スルタンは、アラビア語でなにやら飲み物と料理を頼んだ。

出てきたのはサウジアラビアの伝統料理カプサだった。こ

のカプサは炊き込んだ米の上に大きな羊の肉を沢山乗せていた。

二人は、右手の指を使って上手に食べていたが、慎太郎はなかなか慣れることが出来なかった。手で食べるのは結構難しかった。慎太郎は、これまでもカプサは食べたことがあったが、この店のものは飛び切り上等だった。

「シンタロウ、この店は評判のところで、いつも超満員なんだ。今日はすぐに座れて良かった。」

とスルタンに言われたので見回してみると、確かに各仕切りには客が入って満員だった。

皆、美味しいところは良く知っているし、そういうところが何時も満員なのは世界中どこでも一緒だ。

「ところで、今度、ちょっとアシールに帰ってくる。父の結婚式があってね」

とスルタンは喋り始めた。

「えっ、お父さんの結婚式・・・、お父さんは一体幾つなの」

慎太郎は驚いて聞いた。

「もうすぐ、七〇になる。この間、四人目の母が病気で死んでね。その後釜なんだ」

とスルタンは答えたが、慎太郎の納得の行かない様子に気が付き説明した。

「父はまだ若い方だよ。この間は、一〇〇歳の老人が一九歳の女性と結婚した。とは言っても、これはまあ稀なケースだけど・・・そうそう、そう言えば八〇台の老人が、七十台の老女と結婚したケースもあった。新しい母は三〇歳らしいから、僕よりはちょっと若いね」

慎太郎は、結婚すると言うスルタンの父親の年齢にも驚いたが四人も奥さんを持っていることにも驚いていた。最近はリヤドの普通のサウジ人は一夫一妻が多くなっていたからだ。慎太郎の知っているサウジ人のエリート官僚、民間企業

の幹部は、口を揃(そろ)えたように複数の妻を持った場合の難しさを彼に訴えていた。

彼女等全てを何から何まで平等に扱うのは、とても出来そうにないからと説明するのだった。

その点、アルバハのような地方では、昔通りの考え方の人間が多いのかも知れなかった。

「父は、四人の母を本当に平等に扱っている。物をあげる時には全員にあげるのはもちろんだけど、誰が反抗的な行動をとっても四人すべてを責めるし、誰が父と口論しても四人すべてを黙らせるようにしている」

スルタンは得意げに説明した。

そして、慎太郎に、車で連れて行ってあげるから、この結婚式に出席しないかと勧めた。しかし、スルタンの田舎には、車で一〇時間はかかるということだったし安全のため籠(かご)の鳥生活を決め込んでいる慎太郎にはもともと無理なことだった。

慎太郎は丁重に断わらざるを得なかった。

この日の料理は、カプサとヨーグルトのような飲み物だけだったが、量が多くてとても食べきれなかった。すると、スルタンは、店の人に頼んで、残りを包ませ、慎太郎に持たせた。慎太郎は単身だったから、これを食べきるには一週間もかかるだろうと思われる量だった。

サウジの飲食は総じて安い。テイクアウトなどは激安だ。日本でいえば銀座にあたるようなファイサリア・モールの外国料理店でも二〇リヤル(約六〇〇円)も出せばペプシコーラ付きで食べきれないほどの量の食事が買えた。アルミ缶に入ったペプシコーラなどの清涼飲料は一リヤル(三〇円)だった。ちょっとしたレストランでも六〇リヤル(一八〇〇円)も出せば十分だった。一〇〇リヤル(三〇〇〇円)も出すと高級料理となる。このサウジレストランでは自分でお金を出さなかったので、わからなかったが、恐らく一人六〇リヤルを下回っていたのではないかと思われた。

慎太郎は、一週間に一回程度は、オスマに頼んでタミミ・スーパーに買い物に行っていたが、タミミ印のミネラルウェーターは一・五リットル入りのペットボトルが一ダース入っ

て一〇リヤル(三〇〇円)弱だった。食パンなどもちょっと大き目の一斤で二リヤル(六〇円)だった。

そのせいもあるのか、サウジでは食べ過ぎによる肥満が大問題で糖尿病患者が多かった。

サウジの糖尿病患者は、この数年間で二四%増え、五〇〇万人に達しつつある。サウジの人口は二二七六万人、内外国人が六一四万人だからサウジ人三人に一人程度とかなり高い数値だ。サウジの病院では、毎日、数十人単位で重症の糖尿病患者の手足を切断する手術が行われているという。飽食もまたサウジの大問題だった。慎太郎は、原油価格が上昇し収入が増えるとますますこれに拍車がかかるのではないかと思っていた。

スルタンも夏休みでアル・バハに帰り、慎太郎の周囲からは、親しい友人が、皆、姿を消した。

そんな時、慎太郎はファイサリア・モールで事務所にいたラミアとぱったり会った。

既に午後九時は回っていたが、サウジ人は宵っ張りで未だ大勢の人が買物を楽しんでいた。子供も含めた親子連れも沢山いた。

慎太郎は、いつもの通り親しげに話しかけてくるアラブ人達と挨拶をしながらモールの中を歩いていた。挨拶は彼等にとっては何でもないことかもしれなかったが慎太郎には楽しいことだった。

すると、黒いアバヤを着た美しい女性が微笑みながら慎太郎に話しかけてきた。黒いベールで口と鼻を覆っていたが大きな円らな瞳はよく見えた。

「ミスター・イケナミ、こんばんは」

とその女性は言った。

一体どうして自分の名前を知っているのだろうかと訝しく思ったが、じっくりとその目を見て気が付いた。昨年一二月にリヤド支店を退職したラミアだった。支店ではいつもアバヤなど被っていなかったからすぐには気が付かなかったのだ。黒いアバヤに黒いベールで部分的に隠されていると、慎太郎には随分と艶(なまめ)かしく見えた。

「やあ、ひさしぶり。元気かい」
「元気です。池波さんもお元気そうですね」
二人は思わず握手をしていた。慎太郎は、久し振りにラミアの柔らかな手の感触を楽しんでいた。ラミアとの別れがつい昨日のことのように思い出されてきた。あの日、慎太郎は事務所の窓から走り去って行くラミアの乗った車をいつまでも見送っていた。もう二度と会えないと思っていた。
思わず、二人は、そのまま立ち止まって長話をしてしまった。話は尽きなかった。
ラミアはいつも支店で慎太郎と話をするのが楽しかったと言ってくれた。勿論、慎太郎もそうだった。それを正直に言うとラミアの顔は一段と輝きを増し嬉しさを精一杯その美しい顔に表した。
慎太郎も浮き浮きとして来るのを抑えることが出来なくなっていた。
「モールで会ったのは初めてだね。良く来るのかい」
「ええ、ここは好きな場所で結構頻繁に来ているんです。ここは若い女の子に人気があるんですよ。あこがれのスポット

です。実は、私は池波さんがファイサリア・レジデンスにお住まいと伺っていましたから、いつかこのようにお会いするのではないかと思っていました」

とラミアは嬉しそうに言った。

気に入っていたラミアがずっと慎太郎のことを気に掛けてくれていたことを知って慎太郎も嬉しかった。

「ラミアはアル・ファイサリア・ホテル、ファイサリア・タワーには行ったことがあるんだろうけどレジデンスには入ったことがないんじゃない」

「ええ、素敵なところらしいですね」

そう聞いて慎太郎は思い切って言ってみた。

「見学するかい。良ければこれから案内してあげるよ」

慎太郎は断られるものと思っていたが、ラミアは、

「是非、是非」

と行ってついてきた。

思い掛けない展開に慎太郎の胸はわくわくしていた。

レジデンスには、総ガラス張りの裏口があった。
慎太郎はいつもここを通ってモールに出かけていた。そのドアは－Ｄカードを近づけると磁気を感じて空くシステムになっていた。このドアの直ぐ脇には誰もいなかったから誰にも煩わされずに出入りすることが出来た。
ラミアと一緒に入る時、何故か、レジデンスのニヤマトラから“”いつでもお客さんを連れてきても構いませんよ“と意味ありげに言われていたのを思い出していた。
慎太郎は、まず、豪華な室内プールとジムを見せた。ラミアはジャグジーなどを見て歓声を上げていた。明るい陽気な子だった。全く無防備で慎太郎の部屋も見せてくれと言ったので慎太郎の方がためらったくらいだった。日本なら一人暮らしの男性のところを女性が一人で訪れたいなどとは言い辛い。ラミアはあっけらかんとしていた。
慎太郎の胸はときめいた。
部屋に入ると、ラミアはアバヤを脱ぎベールをとった。やっといつものラミアらしくなった。ただ、いつもよりは強烈な香水を付けていた。その臭いがプーンと部屋中に広がった

。どこかで嗅いだような臭いだった。慎太郎がラミアにあげたインドの香水かもしれないと気が付いた。気に入って使ってもらっていれば、そんな嬉しいことはない。

「ラミア、僕のあげた香水を点けてくれているの。そんな香りがするね」

と慎太郎が言うと、

「そうです。この香水はミスター・イケナミから餞別に頂いたインドの香水です。すっごく気にいっているんです。ほら良い香りでしょう」

と言って、ラミアはアラブ風のワンピースの襟を引っ張って見せた。臭いがより強くなって慎太郎は夢の中にいるような気分になった。慎太郎の目にはワンピースの中の大きな白い乳房がまぶしく映った。ますます強くなる媚香(びこう)と豊饒(ほうじょう)な白い胸を見て慎太郎はくらくらと目まいを感じ胸の動悸(どうき)は高まっていた。インドの香水の中に強烈な性フェロモンが混ぜられていたのかもしれない。慎太郎の理性は完全に失われ欲望が剥き出しになっていた。ラミアの悪戯っぽい目が慎太郎の目のすぐそばで微笑んで

いた。

慎太郎は、いつしか柔らかな熱い体がゆっくりともたれかかってくるのを激しく受け止めていた。その体を強く抱きしめるとふわっとどこまでも慎太郎の手が食い込んでいってしまうように感じられた。

慎太郎の耳には身をくねらせながらくすくすと笑い悶(もだ)えるラミアの心地良い声が響いた。慎太郎はどこまでも官能的な臭いの中で、どこまでも柔らかくしっとりと優しいラミアの温もりの中に埋もれていた。慎太郎の頭の中には、ラミアの明るく笑う声、悶える声、そしてうめく声が渦巻いていた。慎太郎はそれに応えるように無我夢中で体を動かしていた。やがて、ラミアの叫び声が聞こえると慎太郎は突き抜けるような快感を体に覚えながら必死でラミアを抱き締めていた。

気が付くとラミアは窓から外の夜景を眺めていた。灯りにともされた広大な芝生の向こうにはファハド通りがあり沢山の車が疾駆していた。そして、その向こうには闇に沈んだ

白い家々、白いモスクが見えた。右手にはファイサリア・タワーが聳え綺麗にライトアップされていた。

「ミスター・イケナミ、有難う。すっごく楽しかったわ」

「ここからの眺めはまるで夢のよう。本当に素晴らしいところにお住まいですね。羨ましいです。私達のような貧しい人間にはとうてい住めません。本当に有難う」

そう言うと、素早く、アバヤをまといベールで口と鼻を隠した。その姿は艶やかだった。慎太郎は恐る恐る言った。

「ラミア、僕も楽しかったよ。また、会いたいね」

ラミアの目が一瞬キラリと光り、この世のものとも思えない美しい微笑があったが応えは無かった。

慎太郎は、下のガラス張りのドアまでラミアを送っていった。

「さよなら」

と陽気に手を振って遠ざかって行くラミアを慎太郎はまだ夢見心地で、ただ、ぼんやりと見送っていた。手の中には知らない内にラミアの新しい名刺があった。“アルバハ”と

いう広告代理店の渉外部長という肩書きだった。

―ラミア、有難う・・・

その後、何事も無く月日は過ぎて行ったが、海外から欧米人が夏休みを終え帰ってくるのを待っていたかのように、九月一五日にリヤドでテロが復活した。

午後二時四五分に、リヤド東部アルナシーム地区のクライスロードに面したディスカウント・センターの駐車場で国家警備隊のコンサルタント業務をしていた英国人が狙われた。彼は頭に二発、胸に二発の銃弾を受け車の中で死んでいた。フロントガラスが粉々に砕け散っていて、運転席に座ったところを前面から撃たれたことは明らかだった。犯人が駐車場でずっと彼を待ち受けていたとは思えないので、彼の行動を追跡していたに違いない。

他方、治安部隊も九月一九日に北部ヨルダン国境近くの都市タブークで銃撃戦の末に指名手配者一人を逮捕した。

一〇月に入ると、四日にはリヤド東部の外国人居住地区付

近で、一二日にも同じくリヤドで治安部隊とテロリストの銃撃戦が展開された。一二日の銃撃戦では最重要指名手配者の内の一人が殺害され最重要指名手配者は一〇人へと減少した。

イブラヒム、植木はとっくに休暇から戻っていた。

彼等がリヤドにいない間、イラク・シーア強硬派・サドル師の攻勢が収拾したため原油価格は四二ドルから四四ドル程度の高水準ではあったが落ち着いていた。しかし、二人が相次いで戻ってきた九月中旬からは騰勢を強め九月十七日には再び四五ドルを超えた。

このような高価格水準の時には、いつもの通りイブラヒムは嬉しそうで植木は沈んでいた。

九月中旬から下旬にかけては四八ドル、四九ドルへと急上昇し一〇月一日には、ついに五〇ドルを超え、あっさりと史上最高値を更新してしまった。

イブラヒムは、ピキンズの言う通りになったと言って有頂

天だった。とは言え、この上昇はピキンズの主張するオイルピーク論を主因としたものというよりもイラク北部からの石油輸出停止、米メキシコ湾岸におけるハリケーンの影響、ナイジェリアにおける民族抗争などの懸念材料が加わったものだった。

植木はこの時既に石油需給統計の国際会議に出席するためインドネシアのバリ島に出張して不在だった。イブラヒムは植木の話が聞けないのをしきりに残念がっていたが、本当のところはピキンズの言った通りになったことを自慢したかったに違いない。

慎太郎は、このイブラヒムの嬉しがりようは、きっと彼の関係している先物市場で巨利を得たからに違いないと思っていた。彼のスポンサーであるサウジの投資家達からも相当な評価を受けていたことだろう。以降も、ナイジェリアの労使紛争による供給懸念、引き続く米国における石油低在庫などを受け原油価格は騰勢を強め五二ドル、五三ドル、そして五四ドルとじりじりと上昇していった。